



都市・農村交流拠点

都市住民との交流で蘇よみがえった地域コ

おくたま海沢うなぎわふれあい農園 (東京都西多摩郡奥多摩町)

■ プロジェクト実現のプロセス

おくたま海沢ふれあい農園は、奥多摩駅から昭和橋を渡り、多摩川沿いに右岸を海沢方向にしばらく下ってから海沢神社への右の別れ道を上がった台地にある。歩くと30分程度であろうか。町有地を中心に、周辺の不耕作

農地を借地することにより、総面積11730㎡のこの施設を整備し、平成19年4月にオープンした。

施設は、管理棟(191㎡)と各区画にラウベ棟を有する「滞在型農園」(10区画、各区画270㎡、ラウベ26.5㎡)、「日帰り農園」(25区画、各区画50㎡)、「摘み取り農園」(4200㎡)

から構成されている。

■ 主体の取り組み方

管理棟では奥多摩町観光産業課の天沼係長と農園の管理運営責任者(コーディネーター)の堀隆雄さんが対応、説明してくれた。堀さんは以前、飯山市で自然体験のインストラクターを



左上(2点)／農園で野菜を収穫してよるこぶ子どもたち 上・下／滞在型農園で講習を受ける利用者

コミュニティ

していたが、全国公募の中から選ばれて現在の仕事に就いているとのこと。

奥多摩町がこの施設整備を考えたのは、「奥多摩町グリーンツーリズム事業報告書」を取りまとめた平成12年度にさかのぼる。

人口の減少と高齢化の進行により地域の衰退が懸念されたことから、





1

1—大根の収穫を楽しむ地域の親子グループ 2—都会人による耕作放棄地現状回復作業「気分は開拓団」
3—子どものための竹細工教室。農体験以外にもさまざまな体験教室を開催 4—企業ボランティアによる耕作放棄地回復作業



2



3



4



5

5—地元の主婦による「ミツ釜工房」ではランチの提供もしている 6—施設利用者や地元の人が集う夏のイベント風景
7—「ミツ釜工房」によるおまんじゅう作り体験 8—収穫した大根やハクサイ。奥は干し柿 9—野沢菜を漬け物にする施設利用者たち



6



7



8



9



上／雪景色が風情ある冬の滞在型農園 下左／夏祭り「海沢獅子舞」のようす
 下中／町役場の天沼係長(左)とコーディネーターの堀さん(右) 下右／木の香りが気持ちよい管理棟は来園者と地域住民の交流拠点になっている



都会の人々を呼び込み、「東京のいなか」にふさわしい都市農村交流を進め、来村者に元気を授けると共に海沢地域および地域住民自らも元気になることを目指すものであった。施設運営はこの目的に沿って地域住民が中心になって行うことになり、現在、おくたま海沢ふれあい農園運営委員会に3つの部会が組織され、さまざまなイベント・活動を行っている。

- 楽農倶楽部……施設利用者の菜園指導、温室ハウスでの栽培・苗の提供
- 三ツ釜工房……地元の主婦を中心に、料理教室、食育等を行う
- 笹の会……各種イベント企画、福祉施設との連携

地元の人々が中心になって、農園とほかの施設と協力し「気分は開拓団」というイベントを行っている。これは、

都会の人を募って耕作放棄地を現状回復(開拓)する作業で、1年間だけ耕作させてもらい(今年は野沢菜を作った)その後土地所有者に返すという活動である。年寄り夫婦だけだと開拓作業が大変で、いざ息子がリタイアして帰って来るとなったときに、畑が荒れてははまずかろうというところで始めた。今回は7人が参加している。町としては、いずれは農園運営組織を施設の指定管理者にし、自立的な運営を目指す考えだ。

■ ネック克服の仕組みと工夫

施設整備費は、基盤整備、浄化槽、ビニールハウス等を含めて2億1600万円、うち1/2が農水省補助(新山村振興等農林漁業特別対策事業。都市と農村の交流が目的)、1/4が都の補

助であり、町費は約5500万円。経営的には、イニシャルコストを除いたランニングコストのみで見てもコーディネーター人件費を含めて、年間約850万円、収入はラウベ60万円×10区画=600万円、一般区画1万円×25区画=25万円、合せて625万円で若干の赤字となっているが、町としては、費用以上の成果が得られていると考えている。(ラウベの建設費は1棟当たり700万円)

当初、申し込みが殺到するのを恐れ、あまり宣伝をしなかったら10棟埋まらず、二次募集まで行った。しかし、現在は大勢の人が見学に訪れるようになっている。利用者は多摩地域の市の人が多いが、中には墨田区や豊島区の人もある。都会の人が、ここまでやって来て熱心に畑仕事をしてい



奥多摩の山々に囲まれた静かなたづまい

るのを見ていると、自分たちの仕事を見直すきっかけにもなるようだ。この滞在型農園の特色は、ラウベをコンパクトにし（面積も26.5㎡）、垣根も低くしオープンな雰囲気に行っていること。その理由は、それぞれの区画にこもり切りにならず、できるだけ周囲の人々、地域の人々と交流を推進するためだ。

ここでは、市民農園法、特定貸付法に基づいているので最長5年、ラウベは継続者優先、毎年更新願いを出してもらい審査会で決定している。大変良い人たちのため5年後どうするか頭を悩ませているのが現状。

また、別荘代わりに使われると困るということで「使用規定」を厳しくしている。実際には多く利用している人で年間百数十日泊まっている人が



いる。

最後に、こうした取り組みをさらに広げるうえでの方策を尋ねると、次のような課題があげられた。

- 新築ではなく（1棟当たり700万円は高価である）空き家活用の方策（空き家については地域整備課が別途調査中）
- 共同住宅方式での検討（いくつかのクリアする問題あり）など

プロジェクト概要

所在地：奥多摩町海沢497-21
 土地面積：11730㎡
 使用開始：平成19年4月オープン
 施設内容：管理棟（191㎡）、滞在型農園（10区画／各270㎡、ラウベ26.5㎡）、日帰り農園（25区画／各50㎡）、摘み取り農園（4200㎡）
 事業主体：奥多摩町
 事業費：2億1626万9000円
 管理運営形態：町条例により設置・管理（直営）
 連絡先：TEL.0428-85-8685
 （コーディネーター堀隆雄さん）